

論文

中学校におけるいのちの授業の実践的研究 — 基本的自尊感情の育成に着目した効果測定から —

近藤 卓¹⁾、望月 美紗子²⁾、山田 由美子³⁾

田淵 愛子⁴⁾、田中 佑果⁵⁾

キーワード：中学生，いのちの授業，基本的自尊感情，効果測定

1. 問題の所在と目的

近年，我が国の子どもの自尊感情の低さが問題視され，例えば小学1年生から中学2年生まで，上級学年になるにしたがって次第に自尊感情は低下し，中学3年生で一時的に上昇するものの，高校生では再び低下傾向にあった（東京都教職員研修センター，2011）。

自尊感情については，その著作『心理学原理』の中で James (1890) によって「自尊感情」＝「成功」／「要求」という公式で定義されて以来，多くの研究者によって様々に定義されてきた。一方，Rosenberg (1965) は自尊感情を二つの領域から捉え，一方を，自分を他者と比較した際に，自分の方が優れているという，優越性や完全性が含まれた「とてもよい (Very good)」感情とし，もう一方を，自分はこので十分であるという満足であらわされ，自らの基準に照らして自分を受容し，優越性や完全性が含まれない「これでよい (Good enough)」の感情とした上で，後者の「これでよい (Good enough)」の感情の重要性を主張した。

筆者は，二つの領域における自尊感情の考え方を推し進め，自尊感情を「社会的自尊感情」と「基本的自尊感情」に区別して捉えた（近藤，2010）。社会的自尊感情 (Social Self-Esteem : SOSE) とは，他者との比較や優劣で決まってくるもので，勝ったり優れていたりすれば高まる，条件付きで相対的な感情である。いわゆる James の考え方を踏襲するものであり，Rosenberg のいう「とてもよい (Very good)」にあたるものである。一方，基本的自尊感情 (Basic Self-Esteem : BASE) とは，Rosenberg のいう「これでよい (Good enough)」にあたるもので，比較や優劣とは無縁に，理由もなく絶対的，根源的な感情である。自尊感情の「基礎」を為すもので，他者との比較ではなく絶対的な感情として心のうちに存在するものを表す。「自分はこのままでいい」，「生きているだけでいい」と思える

1) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

2) 東海大学大学院文学研究科

3) 鳥取大学附属中学校

4) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科4年

5) 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科3年

気持ちを指し、基本的自尊感情の高さは、自分自身を大切な存在だと認識していることを表している。筆者は、この基本的自尊感情こそが重要であると考えている。

さらに、「基本的自尊感情」を育むためには、自分自身のいのちが何よりも大切であることを教える「いのちの教育」が必要であり、その方法として「共有体験」が重要な要素であると考えている。共有体験とは、誰かとの「体験の共有」とその際のお互いの「感情の共有」である（近藤，2007）。蘭（1992）は、自尊感情の規定因として、重要な他者との相互作用をあげている。そして、子どもの自尊感情は、両親や重要な他者からの受容、注意、愛情などの関わりを基盤とし、仲間や教師との相互作用を経て形成されていくものだとしている。横山（2010）は、子どもの自尊感情の低さの背景について、本来、日常生活の中から体験的に得られるものである、生活体験、人間関係体験、コミュニケーション体験等、子どもの発達過程で必要な様々な体験の欠如が深く関わるものであることを指摘している。このような指摘からも、共有体験は基本的自尊感情を育む要因として重要な視点となり得ることが考えられる。

よって、本研究では、自尊感情を高める要因とは何かという視点から、自尊感情を「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」とに分類して捉え直し、「共有体験」は「基本的自尊感情」を高める、という仮説のもと、基本的自尊感情が低いと考えられる子どもに焦点をあてて「共有体験」を導入した授業を実践し、授業実施前後の自尊感情を測定して比較検討することで、「共有体験」が「自尊感情を高める」ことを明らかにする。

2. 方法と内容

1) 調査協力校の特色と連携

調査協力校は中国地方の大学附属の A 中学校である。市内の中心部からやや離れた地域に位置し、大学のキャンパスと同敷地にあり、附属小学校に隣接している。研究活動においても、附属学校の特徴を活かしつつ、大学と共同しながら、積極的に取り組んでいる。調査協力校との連携においては、学校や教員の事情に配慮しつつ、尊重しながら信頼関係を構築した。特に養護教諭とは密に連携を図り、相互に補完し合える関係性を築くことができた。授業実践までには、授業案のすり合わせ（授業のねらいや評価の確認）、授業資料の検討、使用機材の検討、環境設定、調査日程の検討（実施日の調整）、授業日程の検討（授業数の調整）、調査実施についての説明について、打ち合わせを重ねた。

2) 調査対象

調査対象は、A 中学校 2 年生の全 4 クラスである。実験群と対照群について、それぞれ 2 クラスずつ位置づけた。人数の詳細を以下に示す（表 1）。

表 1. 調査対象

性別	介入群		対象群		計
	A 組	B 組	C 組	D 組	
男子	18 名	17 名	16 名	17 名	68 名
女子	21 名	21 名	23 名	22 名	89 名
計	39 名	38 名	39 名	39 名	157 名

3) 調査方法

介入群には、介入授業の前日（以下、「事前」）に調査を行い、その翌日から1日1コマの授業を4日間連続で行った後、授業後（以下、「事後」）に自尊感情の調査を行った。さらに、その後の自尊感情がどのくらい保持されているかどうかを見るために、授業実施の1ヶ月後（以下、「1ヶ月後」）にも同様に調査を行い、全3回の自尊感情を測定して、比較検討した。調査の流れを以下に示す（図1）。

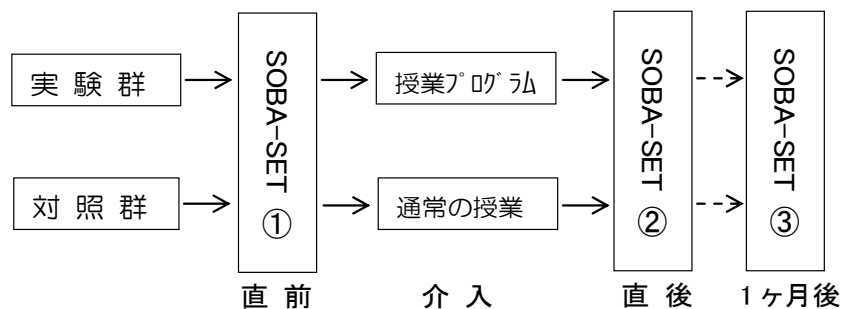


図1. 研究の流れ

4) 調査の実施

調査は、2012年9月~11月にかけて実施した。個別自記入形式の質問紙であり、集合調査形式で実施した。調査は、臨床心理学を専攻する大学院生と対象校の養護教諭および各クラス担任が分担して実施した。教示内容を統一するため、教示内容に関する書類を事前に提示した。回答はいずれも無記名で行われたが、あらかじめ番号が記された封筒に回答済みの調査用紙を封入して提出することにより、連結可能匿名制となっている。所要時間20分~30分程度である。

5) 評価尺度

本研究における自尊感情の評価尺度については、「社会的・基本的自尊感情尺度（SOBA-SET : Social Basic Self-Esteem TEST）」を用いた。本尺度は筆者が開発し（近藤, 2010）、その後、望月他（2016）によって妥当性と信頼性が確認されている。「社会的自尊感情」と「基本的自尊感情」に加え、回答の妥当性を測定する「偏位尺度」から構成されており、各6項目ずつ合計18項目で構成されている。「とてもそう思う」「そう思う」「そう思わない」「全然そう思わない」の4件法で回答を求め、それぞれを4点~1点として得点化した。

6) 実践内容

授業は「総合的な学習の時間」を活用し、4コマを1単元として構成した。授業実施者は調査協力校の養護教諭1名である。「共有体験」の構成要素である「体験の共有」と「感情の共有」の実践をねらいとして、その場の一体感を体験することや、教材の視聴をとおして、そこに生まれる感情の共有を導入した。また、「生きる」ことを授業のテーマとして、教材「つみきのいえ」（加藤, 2008）になぞらえ、これまでの振り返って、家族や友人との「共有体験」を想起して再び心に刻み込むことや、これから未来に向けてどのようなこ

とに挑戦していきたいのか、どのような共有体験をこれから積み上げていきたいのかを、ワークシートして作成させ、「生きる」ことに目を向けさせるよう工夫した。

7) 倫理的配慮

研究の実施にあたり、東海大学倫理審査委員会審査「人を対象とする研究」において承認を得た（第 12127 号）。さらに、対象校の管理職ならびに教職員に対し、口頭と文書により研究の趣旨を説明し、同意を得た。対象の生徒に対しては、調査実施者より、研究の趣旨を説明し、研究の参加ならびに中断における個人の自由意思の尊重、調査において個人は特定できず、また研究で得たデータは、成績評価には反映しないことを周知した。なお授業は、喪失体験をした子どもがクラスに在籍していないことを確認して実施した。また、教育の平等性を確保するため、対照群には、介入群の調査終了後に、介入群と同様の授業内容を実施した。

3. 結果

得られたデータのうち、欠席による未提出や無回答による尺度得点算出不可を除外し、事前調査における男女および介入・対照群の得点比較ならびに基本的自尊感情「低群」の各時点における介入・対照群の得点比較については対応のない t 検定にて、介入・対照群における授業の主効果および交互作用については 2 元配置分散分析にて、介入前後の変化量については対応のある t 検定にて比較検討した。データの情報処理及び分析は、統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics ver21.0 for Windows を使用し、有意水準は 5% 以下とした。

1) 基本的自尊感情における男女差

男子と女子に差があるかどうかを検討するため、基本的自尊感情得点を算出し、平均得点の差の検定を行った（表 2）。その結果、女子よりも男子の方が得点が高い ($p<.05$) という結果が得られた。よって、以後の分析は男女別に行うものとした。

表 2. 男女別の得点比較

尺度	性別	平均得点	t 値	自由度	有意確率
基本的自尊感情	男子(n=66)	17.21	2.19	144	.030*
	女子(n=80)	16.24			

* $p<.05$

2) 基本的自尊感情得点における介入群と対照群の差

介入群と対象群に差があるかどうかを検討するため、男女それぞれについて、基本的自尊感情得点を算出し、平均得点の差の検定を行った（表 3）。その結果、介入群と対照群の平均得点に有意な差は見られなかった。

表3. 介入・対照群別の得点比較

尺度	性別	群	平均得点	t値	自由度	有意確率
基本的 自尊感情	男子	介入群(n=33)	17.12	-.272	64	.786
		対象群(n=33)	17.30			
	女子	介入群(n=39)	15.92	-1.030	78	.306
		対象群(n=41)	16.54			

3) 基本的自尊感情「低群」における介入群と対照群の得点比較

基本的自尊感情「低群」の抽出については、事前の調査結果より判定を行った。その際「低群」の判定においては、平均値と標準偏差を用いている。「平均値－標準偏差」をカットポイントとして、それ以下の値を「低群」とし、それ以上の値を「高群」とした。その結果、男子の低群が1点~15点であり、女子の低群が1点~13点であった。

介入群と対照群における、基本的自尊感情「低群」の事前と事後および1ヵ月後の得点の差を検討するため、対象(2水準)×測定時期(3水準)の2要因の分散分析(混合計画)を行った(表4-1, 表4-2)。その結果、男子については、介入群と対照群に交互作用は認められず($F(2,34)=.128$, n.s.), 授業の主効果および対象の主効果も認められなかった($F(2,34)=1.618$, n.s.) ($F(1,17)=2.154$, n.s.)。一方、女子については、交互作用は認められなかった($F(2,16)=1.312$, n.s.) が、授業の主効果傾向が認められ($F(2,8)=2.868$, $p<.10$.), 対象の主効果も認められた($F(1,8)=5.398$, $p<.05$.) ため、Tukey法による多重比較を行ったが、両群の各測定時期間に有意な差は認められなかった。

表4-1. 介入群と対照群における平均値(標準偏差)(事前と事後および1ヵ月後)(男子)

尺度	介入群			対照群			分散分析 F 値(p 値)		
	事前	事後	1ヵ月後	事前	事後	1ヵ月後	事前・ 事後・ 1ヵ月後	介入群・ 対照群	交互 作用
基本的 自尊感情得点 (n=8)(n=11)	14.25 (1.49)	14.38 (1.92)	15.25 (1.04)	14.91 (.30)	15.45 (1.57)	15.82 (2.86)	1.618 (.213)	2.154 (.160)	.128 (.880)

表4-2. 介入群と対照群における平均値(標準偏差)(事前と事後および1ヵ月後)(女子)

尺度	介入群			対照群			分散分析 F 値(p 値)		
	事前	事後	1ヵ月後	事前	事後	1ヵ月後	事前・ 事後・ 1ヵ月後	介入群・ 対照群	交互 作用
基本的 自尊感情得点 (n=6)(n=4)	12.33 (.82)	13.50 (1.05)	12.67 (1.97)	11.75 (1.26)	12.00 (.82)	10.50 (1.29)	2.868 (.086 [†])	5.398 (.049*)	1.312 (.297)

† $p < .10$, * $p < .05$

以下に、男女別の基本的自尊感情「低群」の平均得点と介入群の基本的自尊感情「低群」の平均得点の推移を示す（図 2-1, 図 2-2, 図 2-3）。

基本的自尊感情(低群)の平均得点(男子)

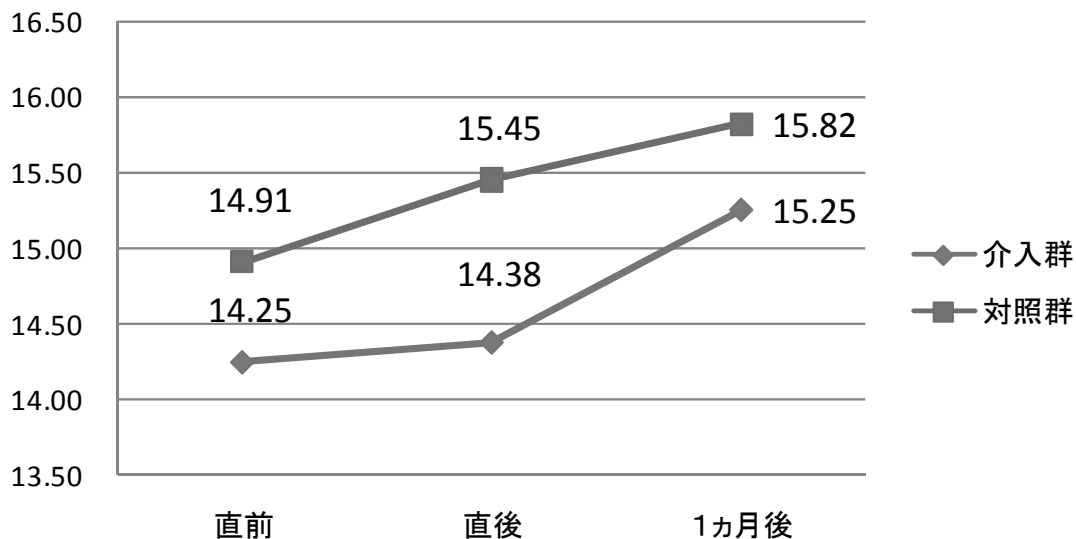


図 2-1. 基本的自尊感情「低群」における平均得点の推移（男子）

基本的自尊感情(低群)の平均得点(女子)

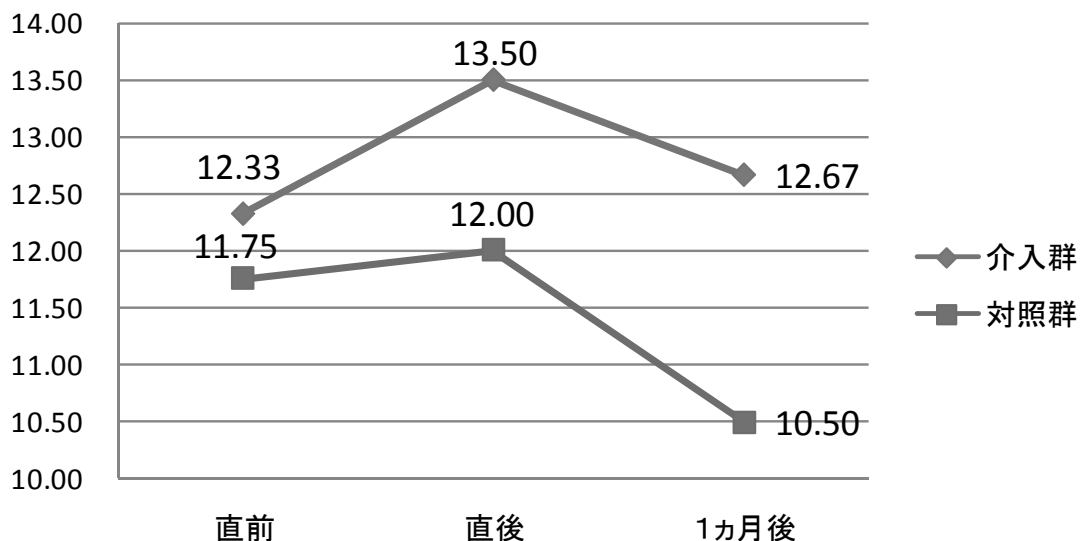


図 2-2. 基本的自尊感情「低群」における平均得点の推移（女子）

介入群における基本的自尊感情の平均得点 (男女)

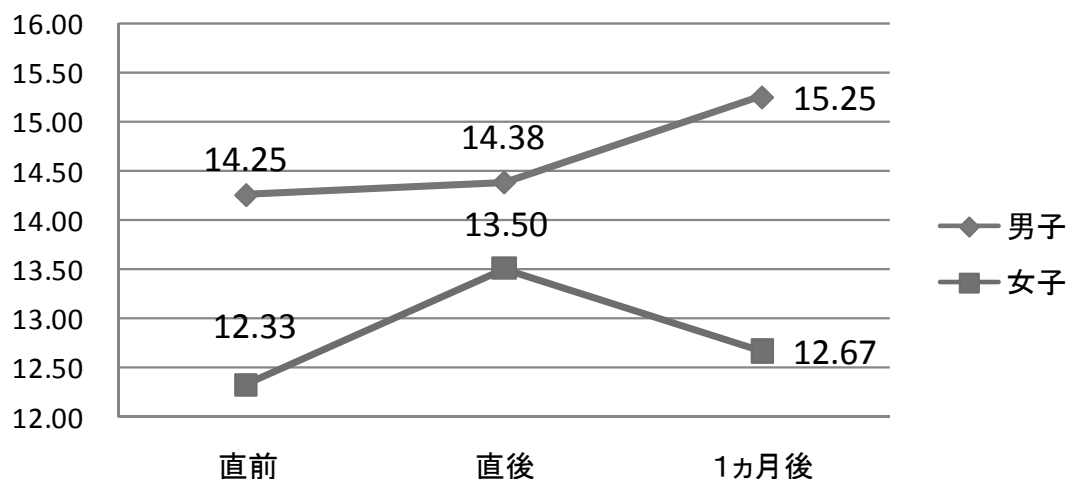


図 2-3. 介入群における基本的自尊感情「低群」の平均得点の推移 (男女)

4. 考察

本研究においては、自尊感情を高める要因は何かという視点から、基本的自尊感情が低いと考えられる子どもに焦点をあて、「共有体験」を取り入れた授業を実施し、授業前後の自尊感情を比較することで、「共有体験」は「基本的自尊感情を高める」ことを明らかにするという目的を設定した。

その結果、授業実施前後の得点比較において以下の3点が明らかになった。

1. 女子の介入群と対照群の対象間において、それぞれの全3回における基本的自尊感情得点の平均値に有意な差が認められた。(p<.05)。
2. 女子の介入群と対照群の全3回の基本的自尊感情得点の平均値において、各測定期間に有意な差が認められる傾向にあった (p<.10)。

以上の結果から、「共有体験」を導入した本授業は本研究の焦点として定めた、基本的自尊感情が低いと考えられる子どもの女子において、効果があったと結論づけることはできないが、介入群と対照群に客観的な得点差があることを考慮すると、本授業が何らかの影響を及ぼした可能性も考えられる。

共感について諸研究をまとめた澤田(1996)の報告によると、女子は男子よりも高い共感を示す傾向にある。現在のところ、共感における性差が元来備わった生得的なものなのか、環境による社会的なものなのかは明らかにされていないが、今後の調査においては子どもの共感性における男女差にも着目し、基本的自尊感情の育成については、男女それぞれに有効な方法を明らかにする必要があると考える。

本研究の限界とそこから生じる今後の課題は次の2点である。

第1に、授業展開の工夫の不足である。本授業のグループワークにおいては、生徒同士の発言のしやすさを考慮し、通常の授業と同様の班構成で実践した。しかしながら、実際

の場面では、班によってグループワークにおける積極性に差が見られ、本来、基本的自尊感情が低いと考えられる生徒において、適切な共有体験がなされなかった可能性も考えられる。今後はそのような差が生じることなく、生徒全員に適切な共有体験がなされるよう、生徒の特徴に応じて、グループワークのメンバーをあらかじめ構成する等の工夫が必要と考える。

第2に、対象の少なさである。本研究においては、基本的自尊感情が低群に該当する生徒に焦点をあてていたが、実際に分析対象となった生徒は少数であり、検定結果における検定力の不足も考えられる。今後は、対象数を増加させることや、複数の学校で実施することで、本授業プログラムの効果がより明確になると考えている。

【文献】

- 蘭千壽 (1992). セルフ・エスティームの形成と変容 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽 (編) セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探求— ナカニシヤ出版 167-226.
- James,W.(1890) . *The Principlles of Psychology*. Dover Publication,Inc
- 加藤久仁生 (2008). つみきのいえ (pieces of love Vol.1) [DVD] 株式会社ロボット
- 近藤卓 (2007). いのちの教育の理論と実践 金子書房
- 近藤卓 (2010). 自尊感情と共有体験の心理学 金子書房
- 望月美紗子 (2016). 社会的・基本的自尊感情尺度の妥当性と信頼性 いのちの教育 日本いのちの教育学会誌, 1(1), 41-50
- 東京都職員研修センター (2011). 自尊感情や自己肯定感に関する研究 (第3年次) 平成22年度東京都教職員研修センター紀要 10, 3-28. II. 子供の自尊感情の傾向を把握する方法と指導のポイント
- http://www.kyoikukensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/bulletin/h22/materials/h22_mat01a_02.pdf (2011年発表)
- 澤田瑞也 (1996). 共感の心理学 そのメカニズムと発達 世界思想社
- 横山正幸 (2010). 子どもの自尊感情と体験の関係について 日本生活体験学習学会誌, 10, 53-62.